

2022. 12. 25. 主日礼拝説教  
聖書：ルカによる福音書1章26～38節  
『働きかけと受け入れ』

クリスマスおめでとうございます。

イエス誕生の物語はマタイとルカによってだけ記されます。共に各福音書の冒頭に記載されますが、両者は文学的にも資料的にも何ら依存関係はありません。しかし、内容上は多くの共通性があります。マリアへの告知、ベツレヘムでの誕生や羊飼い・占星術の学者たちへの啓示がそうです。彼らは啓示によってベツレヘムに行き、マリアと共にいる幼な子を見つけます。そしてそれらを神の業と認め、もと来た所へと帰って行きます。

これらイエス誕生の記事のモチーフは、福音書より先に書かれたパウロ書簡の「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められた」(ローマ1;3-4)という信仰定式に根ざしています。

年代的にも矛盾を含んでいます。ルカ1章1～7節に登場する皇帝アウグスティスの治世は紀元前27年から紀元14年です。その間、ローマの統治していた地域では住民登録はありませんでした。唯一、キリニウスが税金取り立て目的で住民登録を紀元7年に行いましたが、それはマリアのいたガリラヤ地方ではなくユダヤ地方の限られた区域だけのことにしか過ぎません。

又、当時は登録のために生まれ故郷に帰る必要などありませんでした。さらにヘロデ王は紀元4年の3～4月に死んでいます。

これらのことから、住民登録の目的とは「全世界の救い主・アウグストゥスの平和」と讃えられたローマ帝国の版図の片隅という舞台装置の中に、真の平和の救い主であるイエスが時と場をもって誕生したという宣言文です。

そして本日の処女懐胎も、復活の主は全ての者の主であるというパウロの神理解(フィリピ2章)からルカによって書き下ろされました。それは、イエスがユダヤという一民族に決定的・必然的束縛を生まれる前から持たないという宣言なのです。つまり、マリアがユダヤの構成員たる民俗宗教の担い手たる「男性」と結ばれないという形式が必要でした。「わたしは男の人を知りませんの

に」とは「わたしは生まれる子をユダヤの民俗宗教にのみ限定させる男性に  
抛ってではない」という普遍的救いへの信仰の表現だったのです。

ルカは年端もゆかないマリアを不安を持った姿で登場させます。おそらくこう  
いった事例を初代教会は受け入れて来たということなのでしょう。

しかし、彼女はこの「不幸」が神の側からの「働きかけ」と知って、「恵み」とし  
て「受け入れ」直して行く道を選択したのです。

わたしたちは神は全能であるといいます。信じる者の願いはかなえられると  
言い、かなえられないときは信仰が足りないと言います。よしんば全能なら信  
仰が足りるようにしてくれるのが筋じゃないでしょうか。罪を犯さないようにし  
てくれるのが本当じゃないでしょうか。マリアも大変です。自分だけじゃなく、この  
事態を村中の人々にも説明して回ってくれれば良いじゃないですか。

不信に対し、罪に対し、神は非力です。けれども、そのように不信と罪の中  
に背き続けているわたしたちの現実を、そっくりそのまま赦し、そして無限に受  
け入れてくださっているのが神なのです。神とはその「受け入れ」においての  
み全能なのです。クリスマスとは神の受け入れの宣言なのです。